

## 第一部

第一回の『ヴェニスの商人』では「憐れみ」が重要なテーマでございました。教皇様は、今年を“**Year of Mercy**”（憐れみの年）と定められていますが、第二回目の講座も「憐れみ」をテーマにした『尺には尺を』でございます。

『ヴェニスの商人』はエリザベス一世時代の劇でした。一方、『尺には尺を』は、ジェイムズ一世が王位に就いた翌**1604**年の冬、『オセロ』とほぼ同じ時期に創作されました。そのため国王一座のパトロンだったジェイムズ一世を意識した個所がございますが、一般には比較的なじみの薄い劇です。

劇の舞台はカトリックのウィーン。女主人公は、厳格な戒律で知られるカトリック女子修道会クララ会の修道女を志願する女性です。材源の女主人公の名はエピティアでしたが、シェイクスピアは、宗教改革以前のアーデンに存在したロクソール女子修道院の修院長イザベラ・シェイクスピアからヒントを得たのか、女主人公の名前をイザベラに変えています。主人公の公爵ヴィンセンシオは、劇中、フランシスコ会の修道士に変装するなど、エリザベス女王時代には上演不可能なほどカトリック色の濃い劇でございます。

公爵は、ウィーンの弛緩した社会秩序を正すために、ピューリタンの厳格さで知られるアンジェロを公爵代理に任命し、旅に出ます。公爵代理のアンジェロは、ウヴィーンを浄化するために、**19**年間眠っていた厳格な法を復活しました。法施行の最初の犠牲者はクロードディオです。クロードディオはジュリエットと婚約していましたが、正式な結婚前にジュリエットを身ごもらせてしまいます。アンジェロは厳格な法を適応して、クロードディオに死刑を宣告しました。

クロードディオの危機を救うため、友人が修道院に入ったばかりのイザベラに応援を求めます。クロードディオの助命のために、イザベラは、ポーシャのセリフを思い出させる「憐れみの美德」を説き、アンジェロの慈悲を願います。思いがけないことに、冷血な人間と思われていたアンジェロは、憐れみを願う清らかなイザベラに魅せられます。アンジェロは、イザベラがその身を差し出せば、クロードディオの命を救うという卑劣な条件を出したのです。職権を悪用して、アンジェロは、死刑の判決を下したクロードディオと同じ罪を犯そうとします。

旅に出たふりをした公爵は、フランシスコ会の修道士ロドウィックに変装して公爵代理のアンジェロの仕事を偵察します。修道士に変装した公爵は刑務所に赴き、クロードディオに死を迎える心の準備をするよう助言しました。イザベラも刑務所のクロードディオを訪れ、アンジェロが出した「取引」を打ち明け、妹の肉体を代償に生きるよりも、潔く死を受け

入れるように願うのです。ところが、クローディオは死の恐怖を語り、自分の命を救うためにアンジェロと一夜を共にするよう願いました。兄の願いを聞いたイザベラは、激怒します。

少し説明を加えますと、材源では、少女を凌辱した弟の命を救うために、女主人公エピティアは行政官とベッドを共にします。ところが、シェイクスピアは、身を汚して弟の命を救った女性の「自己犠牲の美談」を大胆に書き換えました。クローディオの命を救うために身を汚す罪深い行為を断固拒絶する点で、イザベラは新しい女主人公像と言えるでしょう。

膠着状態に陥った問題を解決するために、修道士に変装した公爵が乗り出します。公爵は、アンジェロの以前の婚約者マリアナの助けを求めました。アンジェロは、持参金を払えなかったマリアナとの婚約を破棄しました。アンジェロに見捨てられたマリアナが、イザベラの身代わりにアンジェロとベッドを共にし、クローディオの命を救う「ベッ・トリック」に加わります。アンジェロは、相手がマリアナとは気づかずベッドを共にしますが、卑怯にも、イザベラとの約束を破ってクローディオの死刑命令を発します。

イザベラは憤慨し、約束に違反して兄を処刑したアンジェロの罪状をウィーンに戻ってきた公爵に直訴し、正義を求めました。その後、アンジェロの罪状が暴露されると、公爵は、マリアナの名誉回復のためにアンジェロに結婚を命じます。挙式直後、公爵は、改めてアンジェロに死刑を宣告したのです。マリアナは、夫アンジェロの助命を公爵に嘆願します。マリアナは、兄を殺されたイザベラに、夫アンジェロの助命を共に願ってほしいと応援を依頼しました。イザベラは、不条理なマリアナの願いを聞き、逡巡した末、アンジェロの助命を願います。イザベラは、憐れみを体現する人物として描かれていると神父様は説明されました。

その後、公爵は、死刑になったはずのクローディオが生きている事実を明かします。最後に、公爵は、イザベラに、二回、プロポーズします。シェイクスピアは、イザベラの答えを書きませんでした。イザベラの答えに関して、修道女を志願しているイザベラは承諾しなかったでしょうと、神父様はコメントされました。

舞台では、演出家が、さまざまな解釈を披露します。イザベラが公爵の頬を強く打ち、退場してしまう演出もあれば、イザベラが公爵のもとに駆け寄って抱き合う演出もあり、また、長い沈黙の後、公爵のプロポーズを受け入れる演出などもございました。現在、時代性を反映した多様な演出で上演されています。

## 第二部

### 質問1. シェイクスピアと法律に関して

- ・シェイクスピアは法律や弁護士、訴訟等に関する深い知識があったのでしょうか？

お答え：ヘンリー八世により社会秩序が変わったため、法が社会と深くかかわるようになりました。ロンドンの法学院（**Inns of Court**）出身者が、シェイクスピアのパトロンだった事実もあり、ソネットにも法律用語が出てきます。さらに、**1570**年頃のシェイクスピアの経歴に関する諸説の中には、法律家のもとで働いていたという説もございます。

また、シェイクスピア自身、紋章と紳士の身分の申請や土地借用手続きなどに関与した経験から、法律に詳しかったと考えられています。

・シェイクスピアは弁護士を雇っていたのでしょうか？

お答え:そのような記録は残っていません。

・シェイクスピアは訴訟をしていますか？

お答え:訴訟にかかわった例の一つとして、シェイクスピアの下宿先の一つ、シルヴァー・ストリートのマウントジョイ家と娘夫婦との訴訟で証人になった記録が残っています。

質問2. 公爵は王権神授説を唱えたジェームズ一世に例えることができますか？

また、シェイクスピアは、劇団のパトロンになったジェームズ一世を意識していますか？

お答え:公爵からはジェームズ一世を想起させる個所が散見され、公爵にジェームズ一世の姿を響かせていると考えられます。シェイクスピアには、劇団のパトロンとなったジェームズ一世を喜ばす意図もあったことでしょう。劇は比喩的な意味で道徳劇とみなすことが可能で、その場合、公爵は **power divine** を、イザベラが **mercy** を体現します。

最後に、イザベラが第二幕第二場でアンジェロに嘆願するセリフ “**No ceremony...**”、“**Why, all the souls...**”、“**Merciful heaven!...**”（第二幕第二場）と、第三幕第一場のクローディオの “**Ay, but to die...**” のセリフを全員で朗唱し、第二回の『尺には尺を』の講座が終わりました。